

王様は平穩が欲しいよ
うです。

ユーリ・クラウディア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意・この作品は作者的都合により完結しない恐れがございます。また、作者の原作知識が著しく欠損している挙句、更に神話をもとに構成される、まつろわぬ神達の設定が激甘になって居ます。それでもよろしい方だけご覧ください。

何此処とは無い、只主人公が生き残って平穩を勝ち取るために頑張る。そんな話。

目次

プロローグ	1
初めてのお使い	6
初めての神殺し	14
取り敢えずイタリアに行こう	22
戦いは大抵博打と高火力ブツパで何とか なる。	30
ストーリーカーお嬢様襲来	38

プロローグ

人生平和が一番だと思う。

この思想は俺に限った事ではなく、人類の殆どの人間がそう思っているだろう。

まあ、中には刺激を求める人もいるだろう。人間は適度な刺激がないと逆にストレスに感じてしまう。中には命を掛けて刺激を求める生物的に割と不思議な生き物だし、それは理解できる。

だって、考えても見てくれよ地球上の生物で生きる為に生き死にに關しての刺激的やり取りは良くあるが、完全な娯楽的意味合いの刺激が必要な生物って人間位なものだけ？野生動物の殆どがその手の刺激を狩りなどの生存に必要な事で補えるのだ。

サルとかもそうだったものが必要なのでは？と思つたけど、アレは生物学的に人間の祖先の形みたいなものだ。人間と似たような思考パターンしてても不思議じゃないわ。それに俺の知る限り奴らの娯楽物資は基本人間から盗んで来たものだし。すぐ飽きて、道端に捨てんだろ？だから奴らはカウントしない。

あ？草食動物は如何かって？そんなもん自分で調べろよ。

まあ、何が言いたいかというと、そんなこんなで例に漏れず俺も平和が一番だと思っ

適度の刺激があればそれでいい一般人の端くれだと言いたいのだよ。

で、何故こんな話しをしているかというのだ。

おっと、そういえばまだ自己紹介をしていなかったな。

俺の名前は：ちよつと思い出せない…。

い：いや、：ね？ちよつと待って？なぜ思い出せない？

まあ、取り敢えず置いておこう。話しが進まない。

25歳、男、独身、会社員だ中堅大学を上の中くらいの成績で卒業して結構いい感じの会社に勤めている。最近、英語を話せるからという理由で海外に良く出張に行かされている。

まあ、彼女いない歴〓年齢なんてことは無いが、それでも過去に一回だけだ。ちよつと愛が重かったとだけ言っておこう。

人間関係は良好、程々な数の友達はある。垣根無しの信頼関係がある友人は3〜4人くらいだけだな。

趣味は此れと言ったものは持っていないが昔から漫画とかアニメとかはちよくちよく見てたし、最近ではラノベも其れなりに読んでる。言っておくがオタクではないぞ。ちゃんと他にも教養ある本も沢山読んでる掛からな。別にオタクが嫌いなわけではないぞ。その辺は自分の裁量で選んだ事とやかく言うほど野暮ではありたくないしな。

オタクに偏見がないと言えば嘘になってしまふかもしれないが、それでも嫌悪している訳では無い。まあ、何だかんだで世間体を気にしてしまふ俺の豆腐メンタルがちよつと反抗しているだけだ。

でだ、長々と喋っている訳だがそろそろ本題に入ろう。

俺は、今、女性に抱かれている。

アレだぞ、抱かれてるつてのは、夜の営み的な抱かれるではないぞ。

そつちを想像しちやつた奴。ちよつとそこに正座しなさい！

まあ、普通に赤ん坊を抱く感じで、抱かれているわけですね。

え？意味が分からない？そんなもん俺にも分からない。

俺だつて意識がハッキリしないし目も霞んで殆ど見えない。

彼女が女性だという事も声で何とか分かつたくらいだ。

それだつた、耳もよく聞こえない中よく聞き分けたと自分を褒めたいくらいだね。

話を戻そう

俺はこの状態を結構長い事続いけている。

よく分からんが意識がハッキリしてから既に一週間くらいたつてると思う。

で、その中で分かつた事は俺が赤ん坊に戻っているつて事さ。

いや、参つたね、ナニコノテンプレ：

いやね、さつき少し触れたけどさ、俺も結構ラノベ見たいなサブカルチャーを嗜んだ訳だから。この状況が何となくテンプレよろしく転生物だというのは分かったよ。

此処でファンタジーな感じの転生だったらおいちゃん死を覚悟したよ。

でもさ、なんか赤ん坊である俺のあやし方が現代日本の芸風にそっくりなわけだよ。

言葉も日本語だし。

そこでおいちゃんやったー！と内心手を上げて喜んでいたわけよ。

処がどっこい、現実は甘くなかった。

そこで、出て来たのが今世における俺の名前だ。

改めて自己紹介をしようか。

俺の名前は草薙護堂、0歳（精神年齢25歳）よろしく。

この名前、最初は気づかなかった：

だけど気付いてしまった。この名前の主人公を知っている事を。

はい、テンプレ的に二次創作的なアレでした！

確証はない。でも、一度そう思ったならもう思考は止まらない。

端的に言おう、ヤヴァい。

ハッキリ言って生存確率がファンタジーな転生より落ちた気がする。

神とドンパチする作品の主人公に転生？憑依？した訳だから最早因果律的思考から

考えて神とドンパチは避けられないんじゃないかね？と思うわけよ。

外面主人公でも中身ポンコツ一般人な俺は如何したらいいんだ！死ぬわ！

テンプレならテンプレらしく神様特典くれよ

まあ、地球外生命体とロボットで戦ったりヒロイン平気でグロイ死に方していく某エロゲみたいな世紀末何てレベルじゃない破壊ストーリーな世界じゃないだけましと考えた方が精神的にクリーンでいられるか…。まりもちゃん俺のトラウマなんだよね…

だからと言って、この平穏な日常を諦めて座して死を待つだけなど愚の骨頂！

俺は足掻くぞ！目指すは平穏な日常だ！

ハア…語ったら疲れた。

まあ、何はともあれこういう時はアレだよね…。

何処かの不幸なヒーローの口癖。

それでは皆さん一緒に

せーの『不幸だあああああああああああつつつつ!!!』

初めてのお使い

取り敢えず近情報告としては無事高校受験に受かりました。

ああ、原作的には確か高校入学前の春休みにカンピオーネに成っちゃうんだよな…

確か…アニメ的にはアレはゴールデンウィークかなんかだったような気がする。

そもそもアニメ版は原作との差異があつたけどどうなる事やら…

まあどちらにしても、もう記憶が劣化してかなり忘れてしまたがそれでも、もう神との戦いまでの秒読みが始まっている感じだ。

まあ、これは良いだろう。

どうせその内爺さんからお使いがてら行ってこいと言われるだろうから、その時が勝負だ。

でだ、これまでの間俺が何をしていたか気になるだろう。

良いだろう教えてやるよ。

簡単だ、ひたすら世界中の神話について勉強と考察をしてきたよ。

そしたらおまけで歴史の知識がそこらの専門家と変らんレベルで身に着いたよ。

後はそうだな…普通に一般教養を其れなりに勉強した。

なんにせよ日本では学歴は大切だからな。

前世の記憶を相まって学内順位不動の一位になっているよ。

スポーツについては原作では野球をやって居たみたいだが俺は帰宅部だ。

その代わり全て我流だが武術の特訓をしている。

ん？なんで我流かって？そんなの型にはまった流派じゃ神殺しなんざできる訳ないからだよ。

それが出来るのは歴史的英雄に成れる天才位な物さ。

俺はそんな天才じゃないからな、原作でもウルスラグナの討伐はメルカルトと協力し奇策を持つて討伐していた。その後の戦いは反則級の権能を使ったゴリ押しだ。

つまり、この体は運動神経は良いが天才級ではない。草薙護堂の真価は何物にも捕らわれない発想力、ならば型にはまった武術では逆に視野を狭めてしまう。だから、最低の基礎だけきちんと学んでそれ以外は全て自身の発想力に任せる事にした。

あと、草薙護堂としての才能と言ったら。洞察力と反射神経だろうか：取り敢えず狭い空間でゴムボールを複数弾いて回避を繰り返して反射神経を磨いたよ。

そして発想の手助けするために化学、物理、生物などの理科系の知識も大量にぶち込んだ。

ついでに陰陽道なんかも古本屋である我が家の蔵から発掘したヤバ気な本数冊から

知識を吸収した。スペシャリストとまでは行かないが、アマチュアくらいの知識はある
と思いたい。

まあ、原作道理なら俺に呪術の才能は皆無だから怖くて使えんがね…。

取り敢えず知識止まりだ。

そんなこんなで今酔っぱらいの爺さんに呼び出された俺だが、いやな予感しかない
な…。

案の定だったよ…

イタリアに行つて来いとき。

取り敢えず結果から言うといタリア行は決定だ。

押し切られた。どうやったか知らんけど妹まで味方につけてやがった。

最後の抵抗としてついでにヨーロッパ各地を放浪してから渡す事にした。

時系列をづらして行く事で何とかならないかと考えたわけだ。

上手く行く気がしない…

そう言えば、お使いとか行つた事無いな…。

リアル初めてのお使いが、イタリア行つてこいとか…ハードル高!

「来てから思いついたが、ヨーロッパに長居するとか危険なんじゃないだろうか?」

ギリシャにあるパルテノン神殿正面で護堂はそう呟いた。

ヨーロッパの旅を始めて早2週間、俺は今ギリシャ首都アテネにいた。

そして、この国は数多くの神話が残る神の魔窟と言つても過言ではない。

純粹に観光で来るならかまわないけど世界の裏側を知つてる身としては長居しない方が身のためだな…と今悟つたところだった。

それとニュースを見ていたらイタリアで何やら謎の爆発事故が起きたとか言つていた。

此れはアレですね。最初にエリカ・ブランデッリと遭遇した時の奴ですねきつと。

という事は今からイタリアに行つたら丁度神の戦いが終わった頃に着くかな?

「さて、見るもんも見たし。そうと決まればこの国を出ますかね。」

そう言つて振り向いた時だった。

世界が切り替わった。

正にそんな表現が似合うような現象

大量の汗が全身から吹き出す。

俺はこの現象を知っている…。

知識がこの空間に何が起こったかを自身に理解させる。

「おや、君は私を認識できているようだな。」

目の前にいる一人の男、絵画に出て来そうな薄い布に身を包んだ長身でガタイのいい

男

「……………」

この時の護堂の思考を簡単に説明するなら、絶望の一言に尽きる。

何せ今この場においてまつろわぬ神に遭遇してしまったのだから。

しかも相手が何者かも分からない、自身の手札は魔導書だけだ。

原作ならば事前に相手が何者なのか分かって居て、更に天才級の騎士様の支援があ

り、神との取引に成功して加護まで貰った状態からの戦闘スタートだ。

がしかし、そんな現実自身は自身の行動で幻想へと変わり護堂に跳ね返って来た。

「ふむ、何やら混乱しているようだね。まあ、それはいい、そんな事より君に聞きたい事がある。」

「何でしょう……？」

護堂は必死に冷静を装ってそう返す。

「なに、簡単な事だよ。私は娘を探していてね。君が私を認識できているという事は神についても知っているのだろう？ だったら、他の神の動きも少なからず知って居そうだからね。娘が何処に居るか知らないか？」

護堂は神の言葉を反芻し言葉を選ぶ。

「娘……ですか？ 申し訳ないがまずは娘さんの名前を教えてくださいませんか？」

「おっと、これはすまないね、うっかりしていたよ。娘の名前はアテナだよ。」

ゼウス！

護堂はその答えに辿り着いた。ギリシャ神話を少しでもかじっている人間ならば誰だってそこに辿り着くだろう。アテナ、この名の女神は一人、そしてその父はゼウスだ。

雷と天空の神、オリンポス十二柱の頂点

「此処も、娘にゆかりがある場所だね。だから、ちよつと来てみたのだが。矢張り空振りのようだ。」

「ち……因みに、なぜ娘さんを探しているのですか？」

「ん？ ああ、アレは中々いい娘だね、女としては正に絶世の美女と言える。だから、私が食べてしまおうと思つてね。」

「…」

脳ミソと下半身が連動した阿呆だった。

いや、ギリシヤ神話の神々って確かに節操ないしゼウスも可愛い子が居たら食べるという行動を多々とって居たと伝えられているから。まさかと思つて聞いてみたら案の定只の色魔だったわけだ。

「全く、私が相手をしてやろうというのに逃げるものだから、余計な時間を食つてしまつているよ」

そりゃ逃げるは、実の父に犯されそうになればよつほどのファザコンでもない限り全力で逃走するわ。

「残念ながら俺はアテナの居場所を知らないね」

ぶっちゃけ、全く知らない訳でも無い。

原作を基準に考えるなら彼女は今ゴルゴネイオンを探している。

だからゴルゴネイオンがある。赤道黒十字の神として脅しを掛けてゴルゴネイオンを奪取させ、アテナが来るまで待つて居れば半年以内に向こうから姿を現す。

だがこの方法、俺がゼウスに知らせた事をアテナが知ればゼウスからゴルゴネイオンを取り戻す前に報復しに俺の所まで来られても困る。だから、全く知らない事にする。

「…君、嘘をついているね？」

「……何の事でしようか？」

どうなつてやがる!?!なぜ俺が嘘をついた事がバレた？

取り敢えず白を切る護堂。

「神である私に嘘が通じるとでも?」

あ? いやいや、神話の中で神様つてめっちゃ騙されてるじゃねーか。それに原作でも嘘が通じなかつた描写なんざ見た事ねーぞ!

「まあいい、教える気が無いのなら力づくで聞くまでだ。」

「だから私は知りませんよ?」

「それに、私に嘘をついたんだ。君には苦痛を与えてから死んでもらうよ。」

瞬間、空に雲が掛かり雷が落ちる。

「神の癖に器が小さいっ!!」

こうして、草薙護堂の初めての神退治が始まったのだった。

初めての神殺し

さて皆さん、只の人間が雷を交わす事が出来るとお思いでしょうか？

答えはNOだ。

無理です。

つまり何が言いたいかというと

「さて、アテナは何処だい？」

「あ…アガツ…！」

一撃で行動不能にされました。

考えても見てくれ、草薙護堂は主人公でも俺は主人公じゃない。

其れなりに死なない努力はしてきたが矢張り中身が凡人だと主人公補正何て物はつかないようだ。

「早く答えてくれないかね？」

ゼウスが歩み寄って来る。

正直めっちゃ怖い。

なぜこんな事になってしまったんだ…。

分らない、気づけば赤子になって居て。

気づけば、面倒事の中心点になり得る人間になって居て。

気づけば、気づけば、気づけば気づけば気づけば気づけば

気づけば……………。

何なんだよ…

何で俺なんだよ。

いつそこで死ねば楽になるのか？

そんな考えが頭をよぎった。

普段から無意識に溜め込んでいた転生によるストレスが一気に溢れ出して来た。

転生と言う方にしろ今生きていることに変わりはない。だが壮絶な、それこそ一歩間違えれば死につながる人生を送らなければならないというプレッシャーが護堂の精神を蝕んでいた。

ストレスの原因はそれだけではない。そもそも、これは形式的には憑依と言う形で起きた転生だ。元の草薙護堂の人格は何処へ行ったのか？そもそも人格なんてものが有ったのか？もし人格があったならと考えると罪悪感に潰されそうになる。

普段はテンプレだ何だと、メタい思考を心がける事で誤魔化しているが、実際はどうだ？

多くの不安を内に秘めている事は明白だった。

護堂の思考が死で埋め尽くされようとしていた。

そこで、ふと今世の事が頭に浮かんだ。

浮かんだ光景は、家族で食事をしている風景。

家族で食事と言っても少々特殊な家庭環境のせいで食卓を囲むときは基本護堂と妹の二人だけだ。

だけどそれが当たり前で今の日常、二人で取る食事。その光景は笑顔が絶えない平穏。護堂が求めるそれだ。

ああ…

護堂にある思いが願え始める。

「ん？」

ゼウスは違和感を感じて足を止める。

その違和感が何かは直ぐに分かった。

さつきまで絶望に近い表情をしていた。それが今は笑みを浮かべているのだ。

その笑みからは何か得体のしれない何かが感じ取れる。

ゼウスの直感が早く殺せと囁いている。

「…」

ゼウスはたかが人間相手に何故このように感じるのか理解できなかつた。

そう、ゼウスは恐れを抱いたので。

神であるゼウスが人間に恐れを抱いた。それが認められなかつた。

だから、ゼウスは全力で目の前の少年を殺す事にした。

何の事はない。自身を怯えさせたことに怒りが噴出したそれだけだ。

ここでゼウスは思考の淵から意識を戻し、その手にある物を出現させる。

そして最初に目に入ったのは石板だった。

目の前の少年が石板を自分に向けたのだ。

そして、次の瞬間ゼウスは気づいた。その石板に宿る太陽の力に、

石板から光が溢れだしゼウスを襲う。

しかしゼウスも神、瞬時に意識を切り替え。防御に移る。

石板に宿されていたウルスラグナの権能、白馬の化身だ。

如何にゼウスと言えど直撃すれば無傷とはいかない。

しかし、元々護堂の権能と言う訳では無く石板の力で強奪したものであった為威力、持続時間共にかなり下がった物だ。

ゼウスは完全に防ぎきり、護堂を睨みつける。

「手間を掛けさせてくれる…」

その言葉には怒気と殺気が込められ常人であれば意識を持つていかれるほどの物であった。

「黙れ色魔が…こっちはまだ死んでやる気は無い！俺が死んだら妹が一人で寂しい思いしちまうだろうが！」

護堂も負けじと反論する。護堂が抱いた感情は家族の平穏お守りたいと思う気持ち。自身も平穏を追い求めて来た護堂がこれまで家族に与えて貰っていた平穏を、返さずに死ぬことなどできないと言う、決意の心。

「ハッ、人間風情がこの私にから逃れられるものか！頭に乗るな！」

ゼウスが右手を上げ止めを刺そうとした時、右手に握られているはずも物が無い事に気づいた。

「な……!?!」

護堂は立ち上がりながらゼウスに問いかける。

「どうした神様? お探し物は此れかい?」

そう言つて護堂は自身の右手に握られている物をゼウスに見せつける。

護堂が転生者であつたからこそできた事、それは、権能の強奪

本来であればルクレチアⅡゾラとの会話の中で知る事の出来る石板の能力

転生者であつた為に会う前からそれを知つて居た。

そして、この石板は厄介事を引き込むのも知つて居た。

だから、呪力が漏れないようにそれを抑えるためのケースに入れていた。

だから、ゼウスは護堂が石板を取り出すまで此れの存在に気づかなかつた。

だから、権能を強奪する隙を生み出す事が出来た。

「全く…、なんだかんだ言つて、こつちの生活にも未練が出来ちまつたじゃねーか。」

護堂は啞然とするゼウスに右手を向ける。

「あんたが何を思つて俺みたい人間ケラウノスごときにこんな最終兵器フエイトルウエボツを出したのかは知らない

がお陰で助かつたよ。それにしても雷霆ケラウノスつてのは密教法具の三鈷杵みたいな形状をし

てるって説が有力だったと思っただが、実際は剣だったんだな…、いやそれも違うか、この感じから行くと形状はある程度自由に変えられるのか。」

ゼウスは此処でやっとなに返った。

「貴様ツ…おのれ忌々しい人間が…！」

「さあ、終わらせようか…。妹が家で待ってるんだ。」

ゼウスが雷速を持って護堂に突貫し、護堂の心臓を貫いた。

対する護堂は雷霆の力を発動した。

それも自身を巻き込む形で。

「なっ…!? バカな!？」

「さあ、心中だ駄神がツ！雷霆ツ!!」

ゼロ距離からの雷撃

その一撃は神話に置いて一撃で世界を破壊すると言わしめた必滅の雷

場は光りに吞まれていった…。

その日、アテネの街は謎の爆発により大打撃を受けた。

不幸中の幸いにも怪我人はいなく爆心地近くにあったはずのパルテノン神殿も奇跡的に無傷だったそう。この事は大々的にメディアに取り上げられパルテノンの奇跡

と世間で語られるようになる。

取り敢えずイタリアに行こう

草薙護堂が目覚めたのは戦いから10分ほど経過した後だった。

雷霆によってゼウスごと消し飛んだはずの肉体は以前よりも活力が溢れ、今まで上手く感じ取れなかった自身の呪力を明確に感じ取る事が出来るようになっていた。

そして目覚めた護堂が最初に取った行動は逃走だった。

それはもう脱兎の如く、魔王として再構築された肉体スペックをフルに使って幸い誰にも目撃される事無く現場から離れる事に成功した護堂は「ふう〜」と一息ついてから頭を抱えた。

「結局カンピオーネになる事は避けられなかったな…」

多少憂鬱に感じる護堂ではあったが、最早覚悟は決まり今は今後の事を考える事にした。

「まずは、この後についてだな…」

今直ぐに魔王として名乗りを上げることが可能だが、それは先を知る護堂にとってあまり好ましくない事だった。

そもそも、権能の力が足りない。原作の草薙護堂が得た権能はウルスラグナのもの

だ。中でも言霊の剣たる黄金の剣の効果が絶大だった。此れからを鑑みるにあの剣が無い状態では例えオリンポスの頂点たるゼウスの権能があつたとしても、此れ一つでは度しようも無い。

というのも、まつろわぬ神々は世界の至る所で信奉されている為、中には同一視される事で複数の神格が混ざった歪極まりない神として降臨する。そうなつた場合原作でペルセウスがウルスラグナの権能を封殺したようにゼウス単体の権能では心もとない。此処で名乗り出れば戦力強化の前に色々と面倒事を強いられる可能性がある。原作でも力試しと称してサルバトーレ・ドニと決闘させられていたはずだ。

これではいずれ必ず日本を訪れるヴォバン伯爵に勝利する事もできないだろう。ならば次は何をするべきか、答えは簡単だ。

「イタリアの方はまだ本格化していない様だな…」

そう、ウルスラグナ討伐だ。

此れしかない、今直ぐ自信を強化する事の出来る可能性があるのは、イタリアで起きる事が決定しているウルスラグナとメルカルトの戦いに乱入しウルスラグナを確実に弑逆する事だ。メルカルトは状況次第と言つた所か…、原作でもメルカルトとは戦つたりはしていなかったはずだ。戦いの後はアストラル界にでも隠居したのだろう。討伐して自身の糧にしても良いが、ぶつちやけ原作をアニメでしか見ておらず、その先は

友人からサラツと聞いた程度だ。確か、かなりヤバ気な神の封印が解けてそれと戦うって感じだったはずだ。その他にもあの有名な孫悟空と戦うとか聞いたような気がする。

まあ、それは置いておいてだ。このメルカルト、今弑逆した事で後々に何か悪い影響が出る可能性が無くは無いという事だ。既に原作とは異なるゼウスを弑逆した時点で今更ではあるが、それとこれとは話は別だ。

まあ、幾ら考えても答えは出ないだろう。ならばメルカルトとの交渉が決裂した場合はやつも討伐しよう。まあ神二柱相手に両方討伐するとか詰んでる気がするがそんな事を言っていたら何時まで経っても強く話なれないな。

ある程度方針を決めた護堂はポロポロになり殆ど機能を失った自身の服装をみて苦笑いをこぼす。

「取り敢えず急いでイタリアに向かおう。原作道理ならもう時間が無い。」

取り敢えず荷物を回収するために宿泊しているホテルへと誰にも見つからないよう警戒ながら足を速めていった。

護堂が神殺しを成し遂げてから半日が経過したころの事だ。

イタリアのとある片田舎でエリカ・ブランデッリはまつろわぬ神と対峙していた。

お察しの通り神王メルカルトとウルスラグナの二柱だ。

最初は自身が優秀でありそれを証明するために神殺しに挑んだ彼女だがそれは昨日、神獣を相手にした時にその自信を木っ端微塵に吹き飛ばされ、神殺しを諦める事にした。が赤道黒十字が誇る大騎士としてのプライドが、遭遇したのならば被害拡大を防ぐため行くしかないと言う選択肢を選ばせ。自信満々で家を出てきた事も相まって引つ込みがつかなくなったのである。

そして、それが今の現状に繋がる。

神の戦い割って入り戦いを止めるように進言した彼女だが、受け入れられるはずもなく、終いにはウルスラグナに雷を浴びせられる始末だ。

幾度かは躲せた。しかし、神の攻撃を防ぎ続けるなどただ優秀なだけの彼女には出来なかつた。

持っていた盾は雷に弾かれ何処かに飛ばされた。

その時バランスを崩して次の雷は回避できないだろう。

エリカは自身の未熟と奮りを呪った。なぜ神殺しなどと言う暴挙に出ってしまったの

か。彼女は自身の死を悟りながら目をつぶった。

「全ての理を持って、天を支配するのは我が覇道のみと知れ」

しかし、何時まで経っても雷は来ない。

代わりに聞こえて来たのは聖句だった。

別に聖書に乗っているとかそう言う言葉ではない。

だが、それが聖句だとエリカは瞬時に理解できた。

しかし、疑問にも思った。今この近隣にはカンピオーネはいないはずだ。

エリカの思考は、居るはずの無いカンピオーネの登場で混乱を極めた。

この時エリカは気づいただろうか、先程まで恐怖していた自身が安堵していることに。

それが、紛れも無く、今現れたカンピオーネが原因だという事に。

護堂はエリカに降り注ぐはずだった雷を発生するその前に天候を掌握する事で防いだ。

そして、二柱の神に向けて腰を折り挨拶をした。

「神王メルカルト、並びに軍神ウルスラグナとお見受けするする。」

「何者だ……。いや、問うまでも無いな。忌々しき神殺しよ」

最初に反応したのはメルカルトだった。

「我が権能をかすめ取るか、中々面白い趣向よな、神殺し」

続いてウルスラグナが反応する。

「お二方の戦に口出しするのは少々気が引けるのですが、今後の私の為にウルスラグナ、貴方を弑逆しに参りました。」

「ほお……？ワシは眼中にないと？言ってくれるはっ……！」

メルカルトが自身を蔑ろにするような言い回しに怒りを見せる。

「勘違いなきよう、メルカルト、貴方が弱いと言っている訳では無い。ただ、今回私が欲しているのがその軍神の権能だったというだけの事だ。お望みとあらば二柱まとめて相手しよう。」

此れは護堂にとって一種の賭けだった。こんなこと言つて本当に二柱同時に来られたらまず勝ち目はない。がメルカルトに自身が面白い存在だと思わせ交渉を有利に進めるための切り込み。一步間違えれば悪印象を持たれ友好が築けない可能性がある。只でさて既に神殺しの魔王である自身にどれだけ好印象を持たせるかがカギとなる。

だから、まずは自身がお前ら二人相手にしてやつてもいいぜ？と挑発的な態度を取る事でインパクトを与え自身に今日興味を持たせることにした。

最初の言つてから攻めすぎな気もするが、これくらいできなければ神殺しなどやつてはいられない。

「あ……貴方は……？」

そこで、エリカが我に返つた様で、問いかけて来る。

「お嬢さん、悪いけど邪魔だから離れていてくれるかな？話は此れが終わつてからでも遅くは無いだろう？」

取り敢えず本気がかまつている暇は無いので適当に返す。

「え……ええ、分かつたわ」

普段のエリカなら此処で目ざとく色々約束させて自身に有利になるよう現地を取りに行く所だが、我に返つても状況に混乱し、正常な判断を出せていなかった。

エリカが下がったのを確認した。護堂は二柱の神に向き直つた。

「さて、それで？どうする？このまま三つ巴の戦いをするかそれとも、メルカルトが下がるか。将又ウルスラグナが下がって。俺とメルカルトで戦うか。何だったか、メルカルトと俺との二人でウルスラグナをボコにするって選択肢があるが？どうだい？」

護堂は飄々とした態度を心掛けながら提案する。

「ハハハハハッ……面白、面白でわないか！神殺しの少年よ！」

メルカルトは大声を上げて笑い出す。

「だが、答えは否だ。諦めよ。出来ないのであれば三つ巴の戦いで行こうでわないか！」

「良きかな、我に敗北を与えてくれるのであれば！いや実にいい！」

交渉決裂、二柱の神からの苛烈な攻撃が降り注いだ。

今回の場合は仕方がないといえよう。護堂の手にあつた手札が如何せん貧弱過ぎた。不幸中の幸いだったのは二対一という災厄の状態にならなかつた事だろう。

そして、再度交渉する暇も与えられずイタリアの地で三つ巴の戦いが幕を開けた。

戦いは大抵博打と高火力ブツパで何とかなる。

戦いは苛烈を極めていた。

原作では殆ど戦闘をすることなく終わったこの戦いだが、今回はそうではない。

まず、メルカルトが味方にならなかった事が大きい。

そして、ウルスラグナの黄金の剣が凶悪過ぎる。

既に護堂の権能がどの神から篡奪した物かを看破され迂闊に近づけなくなつてた。最早戦闘は泥沼と化していた。

「あー、ちくしょう！何だつて、テメーらは俺を集中攻撃してきやがる！」

ただし、戦況は俺が一人圧倒的に押されていた。

「戦に置いて、最もひ弱な物を最初に各個撃破する事は定石であろう！」

「この程度の事で弱音とは、さっきまでの威勢は何処へ行つた？」

二柱して護堂を狙い撃ちである。

流石に話しの流れからして乱戦になると思つていたのに対して予想外過ぎてどうしようも無い。

くっそ、出鼻くじかれたのが痛手だ。まさか、協力して俺を倒すではなく、個々の意思で勝手に俺だけ攻撃してくる始末。

如何しろと…、まあいい、それならそれで、痛いのは勘弁だし賭けの要素も其れなりにあるが、打開策はある。

「我が絶対の雷をこの手に！」

護堂は雷霆を剣の状態で顕現させ手に取る。

そして、ウルスラグナへ向けて全力で疾走する。

「時期になったか？神殺しよ」

ウルスラグナは残念そうな表情で黄金の剣を構える。

「ハアアアアアアアアアッ！」

護堂は雷霆を袈裟方に大振りの一閃を放つ。

しかし、そのような隙だらけは一撃ではウルスラグナに届く訳もなく弾かれノックバックする護堂

そして、ウルスラグナが隙だらけの護堂に一閃を浴びせる。

「興覚めだな神殺し。これで、貴様の権能の殆どが使い物にならなくなったぞ？」

知を吹き出し倒れる護堂を冷え切った視線を向けるウルスラグナ

「ウ…ガハッ」

内臓も一緒に傷ついたのか吐血する護堂。

しかし、その顔は不思議と余裕が見られた。

「この状況でそのような顔をするとは何か企んで…?」

ウルスラグナの言葉が最後まで紡がれる事は無かった。

「黄金の剣…、言霊を持って神格を切り裂き、神を地へと引き摺り下ろす常勝不敗の軍神ウルスラグナが持つ対神格戦に置いて反則級の力を持つ剣。」

「まさか…貴様…!」

「自分の剣の味はどうだ?ウルスラグナ」

護堂が取った行動は簡単、原作同様魔導書でウルスラグナの権能を強奪しただけだ。

そして、原作同様ウルスラグナにそれを突き立てた。

ただこれをするにはウルスラグナに隙を作らなければならなかった。原作では白馬の力で何とか出来たが今はそれを使い切りどうしようもなかった。だから、わざと隙を作り斬撃を浴びた。攻撃を当てた瞬間と言うのは其れつまり隙となる。ただし、一歩間違えれば致命傷を負いその時点で負けとなる。

広がる黄金の世界。ウルスラグナとメルカルトの両方を飲み込み世界を侵食する。

既に黄金の剣で深手を負っているウルスラグナは最早抵抗する暇もなくハリネズミになり、メルカルトも権能を削られ消耗を見せる。

「全く…、こんな事もあるうかとこいつ等の出典を洗いざらい調べて置いて正解だったぜ」

護堂は誰にも悟られない程度の小声で呟いた。

護堂はカンピオーネになりたくないと思っていたが、それでも心の何処かではそれは叶わないという感情があった。だから原作で現れた知る限りのまつろわぬ神について調べた。勿論他の神についても調べたが、原作初戦のこの戦いが最も難易度の高い。だから徹底的に調べた。更に言うならメルカルトについては原作でも多くは語られて居なかった為、敵対した場合の事を考えてそれはもう鬼気迫る勢いで調べた物だ。ウルスラグナについては不意打ちで出典がすっかり理解できていなくとも弑逆出来ていたのでメルカルト程しつかりとは調べはしなかったが。

「此処までやっても仕留めきれないんだから神つてのは出鱈目だな…。もう呪力が足りない。」

呪力を失い黄金の世界は崩れ去り元の世界へと戻った。

「人の身でありながら我ら二柱を相手にし此処までしたのだ誇つてよいぞ、神殺し。」

消耗したとはいえメルカルトはまだ余力を残している。
最早護堂の勝機は殆ど潰えたと言っても過言ではない状態だ。
メルカルトは止めを刺そうと護堂に歩み寄る。

——戦いに色は必要ない：

「何だ？まだ抗うか、神殺し」

メルカルトは護堂の雰囲気を変化したのに気づいた。

——音も匂いも不要だ。

護堂の手には雷霆が握られている。

しかし、呪力の大半を失った状態では只よく切れるだけの剣だ。メルカルトにとって

の危険度はゼロに等しい。

——相手の動きが分かって居るのなら光だつて不要だ。

しかし、メルカルトは不安を拭い切れなかった。

直ぐにでも勝負を決める為に動きを速め、攻撃モーションに入った。

——無いならかき集めろ。それが駄目なら他から持つてこい。

一閃

ただそれだけ……

ほんの一瞬、神速と呼ばれる領域での錯綜

「無形流『唯閃』」

崩れ落ちるメルカルト

それが意味するのは
草薙護堂の勝利である。

ストーカーお嬢様襲来

日本某所、某宅

まあ、何と言う事は無い、俺の家だ。

あの後、早々に現場を離れ数日置いて、ルクレチア・ゾラに会い石板を返却。その後早々に帰国した訳だが…

「で？俺に何か様かな？」

俺目の前で膝痲づく女性に声を掛ける。

「ハッ！まずは先日、危ない所を助け頂いた事、感謝いたします。」

まあ、お察しの通りエリカ・ブランデッリとそのメイドさんなんだが

「世辞はいい、要件をさっさと言ってくれ。」

ああ、こんな事もあるうかと妹を買い出しに行かせて良かった…。嫌な予感がしたから咄嗟に行かせたけど、その直後に来るなんて…。こんなの見られたら俺…自殺したくなっちゃうよ。

「これは失礼しました。では、貴方様は何なのですか？」

「これはまた随分と曖昧な問いだな。まあ、君らの言う所のカンピオーネって奴だよ。」

ぶっちゃけ、彼女の言わんとする事は分かる。俺は居るはずの無い未確認のカンピオーネだ。原作ではエリカに有った時点では只の人間でその後カンピオーネになる事で身元が多少なりともはつきりしている。

が、今回はエリカに遭遇した時点で既にカンピオーネになっているし、行き成り神に喧嘩を売った戦闘狂だと思われるふしもある。

ああ、どう説明するかな…。

「いえ、それは私共も存じております。非礼に当たるとは分かかっておりますが、御身の素性を調べさせていただきました。御身がカンピオーネになったタイミングもおおよそ見当がついて居ます。ですが、まつれわぬメルカルトを弑逆したあの技はカンピオーネのそれとはまた違った物を感じました。」

ああ、そっち、カツコつけていわんとする事は分かるか思ってたけど、彼女達の情報収集能力を侮ってたよ。恥ずかし。

「…」

しっかし、どう説明したらいいだろうか…

護堂が最後に使ったあの技、本来なら主人公とはいえ、原作の草薙護堂では至れなかつたであろう技だ。俺こと草薙護堂は憑依者だ。以前の生ではサブカルチャーにも結構浸ってたわけで、そのサブカルチャーの世界に来たのなら他の作品の技とかも出来

るのでは？と色々試行錯誤して再現した技の一つだ。

あの時放った唯閃を例に出すと、まず、剣術のベースは以前から独自に開発していたものを使う。此処までは、オリジナルだ。問題はあの時呪力が足りないと言うのと、カンプオーネと言えど人間の限界を超えた一閃を放つ事の出来る身体能力を發揮した、という二点だ。まあ、答えは『一刀羅刹』使いました。って話だ。

少し話がズレるが、草薙護堂の身体能力と戦闘センスが思ってたより遥かに高かった。

流石に生物学的に不可能だったり、物理的に有り得なかつたりする物の再現は出来なかつたが。それ以外は意外と血反吐吐けば何とかなつた。

一刀羅刹についていえば、自分を深く濃く鮮明に感じる事で至れるという趣旨の事が語られていた。それ位なら危険も無く出来ると判断した。だから俺も風呂で素潜りをしたり滝に打たれたりした。修行から5年目で一刀修羅を完全に身に着けた。そこから更に2年で一刀羅刹を身に着けた。ぶっちゃけ一刀修羅も一刀羅刹も常人が使えば死ぬ。実際修羅の時は高熱と筋肉痛と頭痛で救急搬送された。真面に動けるようになるまで一週間かかった。羅刹の時は全身スタボロになって二週間意識を失い生死の境をさまよつた。完治には目覚めてから一年弱掛かった。それ以降は使つてないから、先日ののが二回目の発動だ。ゼウスの時はそんなの使う暇もなく雷撃で沈められた

よ。雷霆奪ったタイミングで一刀修羅は使っていたがその後ゼウス事消し飛んだし身体作り直されたからチャラになって居たな。誰だよ、習得にそれ程危険が無いと言ったの。

まあ、そんなこんなで色々周りに迷惑を掛けた技だがカンピオーネになった事で何とかそんな事にならずに済んだ。キャパが増えて一刀羅刹使っても身体ぶつ壊れるって事は無い。恐らく一刀羅刹は体感3秒くらいに凝縮して使うと本家の一刀羅刹と同じくらいの性能で戦える。今回使ったのが0.00数秒という次元だった為に軽い頭痛と筋肉痛だけで済んだ。

他にも色々と平行して奥の手を使って足りない呪力をかき集めてたけどそれはまあ追々で良いだろう。

後は簡単、かき集めた呪力を雷霆に収束し一閃、メルカルトを切り伏せた訳だ。

「そうだな、アレは人間の限界点に行きついた一撃、と言った所かな。まあ、普通の人間が使えばたった一振りで死ぬ可能性を孕んだ最終奥義だと思ってくれ。俺もカンピオーネとしてのポテンシャルが無ければ恐らく死んでいただろう。」

まあ、隠すところ隠せば喋っても大丈夫だろう。

「で？そんな事が本題なのか？終わったなら疾く去れ」

さつきから出来るだけ魔王として威厳が出るように話してるけどマジで恥ずかしい。

早く終わらないかな、このやり取り…。でも、付け入る隙を見せると自信過剰なお嬢様がストーカーの如く付きまとってくるし…。平穩が欲しい俺としてはそれはちよつとゴメンだな。

ゴルゴネイオンよこしてアテナけしかけて来たのこのお嬢様だった事を俺は忘れな
い。

「…、申し訳ございませぬ。まずは此方をお受け取り下さい。此方が今回の本題になります。」

「…」

受け取ったそれはとてもタイムリーで見覚えのある石のメダルだった。

これ…、ゴルゴネイオンじゃね？